

墳各時代の飛鳥地域の遺跡・遺物の概要を広く一般に紹介しようと企画したものです。この展示によって、地理的にも、経済的にも、有利な立場にあったとは言いがたい土地、この飛鳥がどのようにして、この国の政治・文化の中核になっていったのかを、各人があらためて見直す契機になれば幸いと考えております。

(飛鳥資料館)

居徳遺跡群出土の人骨

居徳遺跡群は高知県土佐市高岡町所在の縄文後期から中世に渡る複合遺跡で、高知県立埋蔵文化財センターが発掘をおこない、出土した骨を古環境研究室に鑑定を依頼してきたものです。奈文研ではその中に含まれていた人骨について3月19日に記者発表をおこない、大きなニュースになりました。それは以下のような人為的な損傷痕を持っていることによります。人骨は縄文晩期後半の刻目突帶文土器を含む窪地から出土し、部位別では大腿骨が左6点、右3点、計9点と計15点の過半数を占めています。

貫通痕 成人女性の左大腿骨の膝のやや上部を正面、斜め上方より幅9mm、厚さ4mmの断面半月形の孔が貫通しており、この断面は一般的な骨鎌の断面と一致します。患部がめり込んでいることから、生前の軟性を持っているときの傷であることがわかり、衝撃の激しさを示しています。裏面は衝撃のため、広い範囲に渡って吹き飛ばされ、これは弾丸の貫通した骨の特徴にも共通します。

創傷痕 貫通痕が見られる同じ大腿骨の近位部には、鋭利な刃物によってまっすぐに切り込まれた創傷が残っています。創傷は骨体の表面、裏面ともに残存部全周にわたり、太股を付け根付近で切断しようと一撃で切り込んだものの切断には至らず、刃を抜いた後、残存部の弾力によって傷は閉鎖し一条の線として観察されるのみです。頑丈な管状骨をゴムホースのように斬り込めるのは薄くて鋭利な刃でなければ不可能です。

刺突痕 大腿骨の遠位端、近位端を欠損した骨幹部の前面に計8カ所のノミ状の工具による刺突痕が残



膝上部骨貫通痕



貫通痕と実測図

っています。それぞれ1cmから2cm内外の間隔で、あるいは2つずつ突き刺されたと考えられます。刃の形状は、幅約1cmの爪形を呈し、一ヵ所で刃が欠けている特徴が共通し、同じ刺突具によることを示します。傷の形状からすると、骨がまだ生の弾力のある状態で刻まれたと考えることができます。

その特徴 いずれの骨も風化の痕跡は見られず、死後、さほど間をおかずしてこの窪地に投棄され埋没したものです。同時に出土したイノシシやシカの傷と、人骨に見られる創傷、刺突傷とを比較すると、前者が筋肉を取ることを目的としたことが明かであるのに対し、後者は四肢を損壊させる意図を窺われます。したがって、人骨の傷は、食人を目的としたものではなく、犠牲者に対する畏怖、憎悪を窺わせるものでしょう。少なくとも9人以上という死者の数に対して、頭蓋骨の破片2点を除けば、椎骨をはじめとする中軸骨や四肢骨の関節部が皆無であるという特異な出土部位の偏りも指摘できます。

(埋蔵文化財センター)

高山市伝統的建造物群保存対策調査

建造物研究室では、2001・2002年度の2カ年をかけて岐阜県高山市の伝統的建造物群保存対策調査をおこなっています。この調査は、重要文化財の日下部民芸館と吉島家が並ぶ地区を含む、下二之町・大新町地区を対象に、新たな伝統的建造物群保存地区(伝建地区)としての価値を調査し、そしてその保存計画立案を準備することを目的としています。高山市にはすでに伝建地区に選定されている上三町保存地区がありますが、実はこの地区の基礎調査も奈文研が1970年代に担当しており、30年越しの調査ということになります。



高山市下二之町の町並み

今回の調査の特徴は、高山市の旧都市域全体を調査し、既存の伝建地区、新規の伝建地区を高山の歴史的環境の総体のなかに位置づけようと試みているところにあります。そのため1次調査として、高山の旧城下町地区の建物を新旧にかかわらず悉皆的に調査し、2000棟以上にわたる調査票を作成しました。その結果、高山の都市変遷が建物を通して浮かび上がったのですが、同時に、高山町家の伝統が少しずつ形式を変えながらも現在に至るまで連綿と生き続けている様子が見えてきました。

この成果をふまえながら、2次調査として下二之町・大新町地区の町と建築を重点的に調査しています。この地区では、江戸から明治にかけて建てられた軒が深く二階のきわめて低い町家群が基本的な骨格をなしていますが、その他の各時代の形式の建物が重層的に混在しており、高山の都市・建築の特質を体現する町であるといえます。現在、住民の合意形成、保存計画の策定に向けて、高山市および住民と議論を重ねているところです。（文化遺産研究部）

研究室紹介

遺構調査室（平城宮跡発掘調査部）

今の遺構調査室は、2001年の研究所の独立行政法人化にともない、建築研究部門の遺構調査室と庭園・整備研究部門の計測修景調査室を統合して誕生しました。現在、遺構調査室には建築担当4名と庭園・整備担当1名の計5名の研究員が在籍しています。研究員は、室内の様々な作業を一手に引き受ける4名のスタッフに支えられ、調査・研究活動に日々いそしんでいます。

平城宮跡発掘調査部には、遺構調査室のほかに、考古研究部門3室と史料研究部門1室があります。



隅楼からみた東院庭園

発掘調査は各調査室からメンバーを出し、チームをつくっておこないます。遺構調査室のメンバーは、計測修景調査室が担当していた測量をおこなうほか、建築史や庭園史といった専門的な視点をもって作業にのぞみます。こうした調査体制は調査部はじまって以来のもので、奈文研の発掘調査の特色ともいえます。考古の研究者だけでなく、建築や庭園、史料の研究者が共同して発掘調査をおこない、精度の高い成果をあげてきたことは、特筆に値します。また遺跡の正確な位置を示す測量のデータ、実測図や調査日誌など発掘調査の資料を整理・管理するのも、遺構調査室が担当している重要な仕事です。

つぎに遺構調査室の研究活動について述べましょう。遺構調査室の主要な研究テーマは何といっても、発掘調査でみつかる建物や庭園の跡など遺跡についての研究です。これまでも遺構調査室では宮殿や寺院の建物や門塀など遺構について、計測修景調査室では平城宮の配置計画や平城京の条坊地割、発掘庭園について研究をおこない、その姿をあきらかにしてきました。また、こうした研究の成果を社会に還元すべく、整備の方法についても研究をかさねてきました。たとえば、平城宮跡の東南隅に復原整備された東院庭園は、この2室の研究成果を目にみえる形にあらわしたもののです。



隅楼